

満州

引揚げ労苦体験記

北海道 竹花 寿々子

海外居住前の生活

私は、東に噴煙立ちのぼる浅間山をのぞみ、名将真田幸村の居城跡の「城下村」しろしたむらで明治四十四年九月に生まれました。昭和三年には、上田実科高等女学校を卒業しました。

大正七年、村に初めて電灯がとまり、幼い私は裸電球の中の赤いフィラメントの光るのを見てびっくりしました。ただただ嬉しく珍しく眺めていたことを思い出しました。

小学校三年生のとき、朝、登校して間もなく、一大音響と共に浅間山が大爆発し、灰色の噴煙を空高く噴き上げ、そのうちに物すごい火柱が立ちのぼり、恐ろしさのあまり子供心にもこの世の終わりかと思いました。

大正十二年、小学校六年生の夏休み明けの九月一日、午前十一時五十八分、突然関東大震災が発生。私はちょうど下校途中で、線路は飴のように曲がり、千曲川に架かる上田橋は波を打ち、一歩も進めずその場に立ちすくんでしまいました。夜になって東の空が真っ赤に染まり、夜空は焦げんばかりの凄い光景でした。これが東京、横浜方面の大震災で死者九万余人と聞きました。後の日本の不況の原因の一つにもなったと聞いております。

記憶に残っている事件は、昭和十一年、陸軍青年将校が起こした二・二六事件です。二十五歳の結婚前の時代の生活は平凡なもので、特筆することはありませんでした。

夫の履歴は、明治三十七年六月、長野県丸子に生まれる。学校卒業後、製糸業依田社に勤務。大正十三年に入隊。大正十五年に除隊。依田社に復職する。昭和六年二月、上海事変に応召。昭和七年渡満。昭和十年拓友の遺骨を持って一時帰国。昭和十年九月に結婚。

海外居住の動機

日本は大正末期から昭和にかけて世界的な不況に喘ぎました。蚕糸王国の長野県は繭価の下落が、一貫目（四キログラム弱）当時の金額にして十円から十二円もしていたものが、一円五十銭まで暴落。生糸もこれもまた大暴落し、生産地の長野県下の諏訪、松本、丸子などの大製糸企業が軒並み倒産しました。県内外からの働きにきていた何千何百人余りの女工さんは、皆失業となったのです。

彼女たちは貧しい家計を助けるために、前借りをし

て製糸工場に働きにきていたそうです。失業した彼女たちはやむなく故郷に帰るのですが、この中には、あの有名な「あゝ野麦峠」の飛驒の峠を越えて、泣きながら働きにきていた女工さんもたくさんいたと聞いております。

農村の次男、三男は働くに職場もなく、耕すに土地もない。帰郷した娘たちも農村にあふれ、貧困の極に達したのです。国民の三大義務と言われた税金もついに納められず、どの家も税金の代わりに家財道具の差押えで、全部赤紙がはられました。加えて、大正十二年の関東地方の大災害にて経済大恐慌になりました。

昭和七年、国は過剰人口対策、経済危機脱出のため満州移住を計画。まず、満州武装移民を東北十一県から、在郷軍人四百数十人を選び、北満佳木斯の奥地「永豊鎮」に入植させる。後の「弥栄村」となる。その中に、私の兄と後の夫になった人もおりました。

弥栄の情勢も徐々に落ち着き始めた昭和九年ごろから、家族召致がはじまり、長野県出身の高山さんも家族召致に帰国され、県下をまわられ地方の新聞社の協

力で、花嫁さんの募集がはじまり、一行二十人の花嫁さんが決まり、まだ見ぬ夫のもとに渡満いたしました。

明けて昭和十年春ぐらいから、私も日本の前途や自分の将来などを考えて、歌の文句ではないですが、「俺も行くから君も行け、狭い日本に住みあきた」

兄も行っている満州へ行こうと決心し、心配してくださる方の仲人で結婚が決まり、九月に渡満することになつておりました。結婚する相手その人は、佳木斯出張所長をやめて弥栄村に帰村する方でしたが、内地からハルビン経由で、花嫁さんや軍医さんら大勢の家族を護衛して帰る途中、横道河子から追分峠に差しかけたとき、匪賊の襲撃に遭い、その家族たちを安全な場所避難させ、自分は撃たれて戦死されたのだそうです。

「北満の朝露と消えた土屋少尉にまつわる涙の悲話」などと新聞にも報じられました。悲嘆の日々を過ごしているころ、「俺が死んだらお前が、お前が死んだら俺が、遺骨を国に持って帰ろう」と誓い合ったと言う人が（後に私の夫になった人）、九月に約束を果

たすため、拓友の遺骨を携えて帰郷しました。いろいろの事情があり、お世話してくださる方の仲人で、土屋さんの御冥福を祈りたく十年九月に、高山さんの御家族と東北地方からの花嫁さん一行と共に新潟県に集合、県知事の奥様より一行に励ましの言葉と記念品をいただき、代表して謝辞を述べさせていただきました。

新潟をたち朝鮮の清津に上陸。満州大陸に向けて牡丹江、ハルビンから船で松花江を渡る。見慣れない満人、ニンニクの異臭、川とは言っても向こう岸が見えない松花江の大河を、車輪のついた船で下り佳木斯に上陸した。途中、まだ匪賊の危険を聞きながら、横道河子、追分峠に差しかかる。土屋さんの御冥福をお祈りしつつ、無事「弥栄村」に到着した。

終戦直前

終戦前の弥栄村は、それは本当に桃源郷でした。文化の恵みはまだ一步手前でしたが、春ともなれば、五月下旬から六、七、八月にかけて野山は一斉にアヤメ、芍薬、鈴蘭、アツモリ草、百合などが咲き乱れ、秋にはキキョウ、オミナエシ、ススキが、山には茸がたく

さん出る。

野菜は胡瓜、茄子、トマト、大豆、南瓜、西瓜、人参、馬鈴薯や、主食の米や五穀が実り、川には人間の怖さを知らない川魚が、餌もつけない釣り糸にたちまち飯盒一杯ぐらいいは釣れ、冬は川が凍結すると、魚は凍って動かなくなるので、子供たちは手で魚とりをし、満人は小さな鰻ほどもある泥鰌しんじょうを売りにきたりしていました。なだらかな丘陵には、ノロ、イノシシ、雉子などがたくさんおり、雉子は庭先まで飛んできて銃で撃ち落とし、肉は刺身にしてたくさん食べました。

ある冬山伐採作業に虎が現れて、村の人たちが銃で射止めて村に持ち帰りました。虎は永豊鎮から四十キロほど奥の七星山に生息していたもので、まだ虎を見たこともない村の人はビックビックして眺めました。この虎の骨は貴重品と言う話で、肉は村中でわけていただき、皮はなめし革にして宮家に献上されたそうです。

母親たちは、冬、オンドル、ペチカの暖かい部屋で羊毛を紡ぎ、ホームスパンを織ったり、夫や子供のために一生懸命に編み物にも余念のない生活でした。

昭和十六年から十九年にかけて、弥栄村視察が始まり、連日の視察者を電話一本で夕方、駅まで迎えに行き、夜は一時、二時まで開拓地の説明をして、翌朝、汽車の時間までに馬車で駅まで送る。時折、内地から各地に援農にきている少年たちも視察にくるので、栄養補給をしてあげることも。農場作業していても、食糧不足で種子の大豆やモロコシを生で食べる、と話をするので。大学、中学生たちは研究に来村、大学生たちは一カ月ぐらい滞在したこともありました。

匪賊討伐の軍隊の接待、兵隊はテント、将校は民家に宿泊、山奥の治安のために駐屯している兵隊さんのために、山と町との中継所に我が家を提供し、軍隊の米・麦と我が家の白米を交換して、昼食のお世話を半年間しました。故郷を遠く離れて奥地まで苦勞してくる兵隊さんを思い、レコードをかけて慰めたり、お漬物など御馳走したり、これも勤勞奉仕の一つとして協力しました。

満州生まれの二世も一軒に二人、三人と誕生して、部落もいよいよにぎやかになった。子供たちは隣近所

の友達と、春は野山に咲き乱れる草花に戯れ、太陽の傾くのも忘れて遊び、冬になると手製の橇に乗って遊び戯れている。秋になると山ぶどうが豊富に熟して、村の農産加工場でぶどう酒になって、村民を楽ませてもらえる。養蜂もしていたので、熊が蜂蜜を失敬して山から下りてきて、巣箱をひっくり返して蜜をなめて山に帰って行くこともしばしばありました。

近くの新潟部落に杜氏（お酒を作る人）の経験のある人がいて、地元で採れたお米を使って日本酒を製造し、軍に納めたり村内で消費したりお陰様で北満に住んでいても、おいしい日本酒でのどを潤すことができ、豊富に採れた野菜で粕漬、味噌漬を作る。収穫した小麦で小麦粉ができ、大豆は豆餅、内地では肥料、満州では馬の飼料に油は大豆油となって、あの戦争中でも食油には不自由しませんでした。米も朝鮮式の水田耕作で、味は内地米より落ちましたが、内地の米事情のひっばくしている時代に有り難いことだった。麦類、大豆類は一戸当たり十トンの供出割り当てがあったが、米類にはなく、我が家は白米の保有量が三年分あり、

古いお米は味は落ちていったが、内地の視察者に御馳走はないが、お米と食油はたくさんあるからとすすめると、有り難いことですと感謝され、畑になっている西瓜なども喜んでいただきました。

現地生まれの二世たちもいよいよ就学年齢となり、長野屯にも分教場ができ、昭和十七年から開校となった。長男、長女の入学が始まる。徳島県出身の新見先生御夫妻が赴任となり、元気な子供たちの登校姿が見られるようになった。子供たちの服装も、春夏は心配ないが零下三〇度の寒さにはさすがに大変、内地では想像もつかない姿です。母親のお手製の帽子、セーター、ズボン、手袋、それに防寒外套、防寒靴下、まるで達磨さん。元気な子供たちで弥栄村は一層活気づきにぎやかになってきました。翌年、我が家の長女も入学。現在のような難しいPTAのような会則も一切なく、母親は自由に分教場に行き、幼い子供の手を引き背中にもおんぶしての参観です。現在、考えると子供たちは民主的な先生、大自然にいだかれての幸せな環境だったと考えます。先生のお話には、「百聞は一見に

し「かず」と言う諺があるが、この児童はお祖父さん、お祖母さんがそして、柱時計なる物が：説明しても理解できないと笑って話していらつしやいました。いかに原始的な生活だったことかを実感しました。

母親たちも婦人会を結成して、母親たちの修養に心がけ、時には本校の校長先生を招き、精神修養のお話を度々お聞きしましたが、ついに校長先生も「このお母さん方にはお話することがちよつと切れませんでした。今日は本を読みましよう」と、大変心に残る内容の本でした。引き揚げ後、近所の若いお母さんにお話しましたら、感激して、「すばらしい本ですネ」と言われました。

終戦直後

そのころ、だんだん南方の戦況不利、アツツ島の玉砕などなどの戦況が伝わってきました。昭和二十年六月から七月にかけて弥栄村にも召集令状がきはじめました。佳木斯市に危険が迫っている由、在留邦人八千三百人ほどの弥栄方面に疎開の噂がはじめて、村民たちも不安な心境でおりました。

八月十日、突然、四十歳前後の男子に弥栄でも根こそぎ動員がきました。八月十一日に牡丹江に向けて出征することのこと。夫は屯長のため毎日役場に出向いており、そこで令状を受け取つたのです。家には電話で事情を知らせ、時間がないため、家には帰れないかもしれぬとの話だったが、でも少しの時間を割いて帰宅。「子供を頼む」とだけの会話。慌ただしく出征して行きました。

銃後の妻は、いつ召集、戦死と言われても、との覚悟をしておりました。不安の中にも平静にして夫を見送りました。しかし、長野屯もいよいよ男の人は、老人、少年の二人だけになってしまいました。大変な事態になったと思われました。周囲は全部満人、果たして安心していられるのだろうか。まず、家の中で非常の場合を考えて、奥の部屋に簞笥と布団を高く積み上げる。子供をかまくまう場所を作る。玄関には目つぶし用の灰を用意し、扉は錠をかけ剃刀一丁用意する。

引揚げ避難

八月十一日、夜、八時ごろ、突然の電話。受話器を

とると「村公所からですが、弥栄村は南方に向かつて避難するので、一週間分の食糧と携行品はリュックサック一個を持って、明朝、六時までに弥栄駅に集合するように部落内に連絡してください」との電話でした。

長野部落は一キロ間隔ぐらいに四カ所に分散している。各組に大至急電話連絡し、自分の組の家々にも真つ暗な雨の中を、転んでは起き、起きては転んで連絡をすませ、自分も朝までに準備した。私は、満人の暴動化などを考えて、重要書類を焼き、衣類に石油をかけて出がけに火を付ける。これは燃えませんでした。

八月十二日朝、家で使用している満人の馬車に親子四人で乗る。ニーヤが自分たちは子供と同じで主人がいなければ生きていけない。是非帰ってきてくれと涙を流す有様。十有余年、銃と鍬と情熱のすべてをかけた築いたこの弥栄村、夫の出征中に敗戦による逃避行、帰れるかどうかもわからない悔しさ。これが二人の幼い子の死出の旅路になるとは…。

弥栄駅には次々に村の人たちが集結してきた。一方では早くも満人が農協倉庫に入って、物品を持ち出す

事件も起きた。汽車は夕方やつときたが、それは無蓋車で千八百余人の家族は身動きもできない状態で乗車。幼い子供をかばうのに母親は必死で、子供はただただ泣き叫ぶ。ようやく汽車が動き出した。

翌十三日、佳木斯^{ズモウ}に到着。市街の建物は燃え上がり黒煙が空を覆う。平和だった佳木斯の街は目を覆うばかり。この時、既に軍属、警察は引き揚げた後、開拓団・一般の日本人だけが残されていたのです。たまたま、この原稿を書いている平成七年七月、あるバスの中で見知らぬ老婦人の話、その老婦人は軍属の家族であったとのこと、牡丹江方面の軍属三千人の家族は終戦前に朝鮮に避難し、途中、犠牲者も出たそうですが、釜山経由で昭和二十年九月には釧路に引き揚げてきていたそうです。話には聞いていたのですが、事実であったことを知り憤りを感じました。

佳木斯をたつて南叉^{ナンカ}から綏化^{ズイカ}に向かう。このころから雨が激しく降り出した。またまた、無蓋車で親も子も薄い夏の衣服は濡れで寒く、貨車の中には水がたまっていた。十二日、弥栄村を出発以来南叉を経て綏化

に到着するまでの四日間、雨と寒さと飢えとの闘いで、子供たちは泣き叫ぶ。この世の生き地獄と化す。ようやく緩化の駅に着き、着ている物は濡れて汚れ髪は乱れ、よろよろする足を引きずって歩き緩化の飛行場に着きました。

東北満からの避難者三万人と聞く。生後九カ月の赤ん坊は母の腕の中で震えている。子供たち二人は空腹で泣きじゃくる。胸が締めつけられる悲しさだ。緩化の手前の南又に着いたときは少し晴れ間があつたが、北満の八月中旬の口中は、濡れた体を蒸しかえす暑さ、夜の冷え込みは晩秋の寒さ、幼い子供たちは次々に風邪にかかりはじめる。格納庫はコンクリートの冷たい床と壁、弥栄村全村民はここに収容された。ここで初めて終戦を知りました。

今は衣食住すべてなく、持ち出したコップ、水筒、缶詰の空き缶が全財産、寒さと食料不足、失意と絶望、日を追って幼い子供は風邪、はしか、肺炎にかかり、次々に死亡した。日増しにその数が増えて百八十余人が病魔と餓死で消えていきました。飛行場の一角には

今日も明日も幼い子供の墓標が増えていった。なす術もなく、涙も枯れ果てた母親が手を合わせるその姿その悲惨さは、この世の地獄絵図そのものでした。格納庫の中は一区切り、千余人近い人たちの病にうめく声、幼子の泣き声が渦を巻いていた。現在六十歳近い私の娘は、今でも幼心にも地獄の底からのうめき声のように聞こえたのが耳に残っていると言う。

そのとき、ただ一つ幸運だったことは、弥栄村で最後に召集されたお父さんたちが、牡丹江で召集解除になつて、八月十七日格納庫で合流できたことでした。

九月に入ると北満の寒さは日ごとに厳しさを増し、このままでは全員が倒れてしまうと責任者の方たちは、緩化の駅に駐屯するソ連停車場司令部にお願いに行き、窮状を訴えた結果、ついに南下が許されたのです。

九月十五日、無念の思いで異国の土となつた数多くの墓標に別れを告げて大連を目指した。我が子を失つた母親は、悲しみに後ろ髪をひかれて狂わんばかりだった。緩化を出発して汽車は南下した。少しでも南の大連まで行けば日本に近くなる。祖国に帰る日も早く

なるのでは……と皆、心に念じながらの、大連までの貨車の十日間は言語に絶する悲惨なものだった。食も無く、水も無く、思い出してもどうして過ごしたのか思い出せません。病人は次々と亡くなった。汽車が停車する度に亡くなった子供たちを線路の傍らに埋める。鉄橋に差し掛かれば川の流れに葬る。月の青白く冴えている光景が今でも思い出される。列車が駅に止まる度に多数の満人、ソ連兵が貨車の中になだれ込み、手当たり次第荷物を略奪する。ソ連兵は壊れた時計、万年筆など知らずに持ち去る。私たちは息をこらして彼らの立ち去るのを待ち、発車を待つのだった。

大連に近づくにつれ、窓外に見える南満の空は紺碧に広がり、真つ赤な林檎が枝もたわわに実っていた。私は母乳が出なくて、九カ月になる赤ん坊にミルクを飲ませる水が無く、停車する度に飛び降りて、機関車の下から落ちてくる水を水筒に受けて、ミルクを溶いて飲ませる。風邪、はしかにかかり、この子もついに奉天駅発車直後に逝ってしまった。わずかに二、三メートル後にいる父親にも、ソ連兵の監視がきびしく、死

に日に会わせることができずして冷たくなった弟を、九歳になる姉は大連まで背負って行った。収容所と決まった大連実業学校まで行き、ここで二十余人の死亡者と共に本多先生の御家族によって弔っていただき、ゴミのつまった防空壕の中に葬りました。七歳になった長男も大連で発病、貧しさと混乱の中で引揚げ一カ月前に「お母ちゃん、内地に帰ったら白い御飯に生卵をかけて食べたいヨ」と言いながら、この子も大連の土となりました。腹膜炎との診断、収容所の医務室で麻酔注射もなし脊髄から水をとる手術をしてもらい、その直後から意識不明、一週間生存していつか、転山の向こうに葬りました。二人の我が子は、異郷大連の地に眠っている。戦後五十年経った今も、私の脳裏には一歳と七歳の幼子で生き続けています。

すぐ日本に帰れるのだと言う考えは甘かった。年内には帰れないようだ。いよいよ働かなければならなかった。大連には日本人がたくさん生活しており、避難民の弥栄の人たちは、大連在住の人たちのお陰で、生きて日本に帰れたと感謝しております。収容所に夕方

疲れた体で帰ってくると、垢で汚れ栄養失調でおなかばかり大きく生気のない子供たちは、廊下にれんがを積み重ね竈かまどを作ってコンクリートの床で摺った高粱をつぶれた鍋、釜で紙や布を燃やして炊事をして待っている。働き先でいただいた残り物を子供たちはどんなに喜んだことか、まるで乞食同様、こうした生活の中では、人間はまったく理性を失ってしまうものなのか。ただ、食べ、己だけが生きているという一個の動物と化してしまうものなのか。子供を亡くして泣き崩れている母親の傍らで、働き疲れて帰ってきたお母さんたちは、ただ日本に帰りたい、御飯を食べたい、おいしい物を食べたいの会話だけです。お互いに悲しみを慰めてあげる気持ちは失われてしまっているのです。

大連での生活。私が女中をさせていただいた一軒は、満鉄社員で戦前は上海に勤められ大連に転勤になられた方だが、その高級な生活を見てびっくり、すべてにわたって高級品、書籍は廊下に山積みです。御主人は政治家志望とか、帰国後はどんな生き方をしているのでしょうか。ある一日は生寿司を作ってお友達を招待

されるとか、市場にお供えをさせられる。市場には新鮮な魚介類、果物が山のよう。奥地からの難民の情けなき、収容所には飢えと病に泣いている人たちがいっぱいいる。せめて一粒のお米でも食べさせてやれたらと。ほかのお宅は張家屯とか言う所の精密機械製造工場勤務の方でした。ソ連に工場を接収され、幹部の御主人は中共軍にねらわれているとの情報に、工場の精密部品に使うダイヤの原石を持って大連に避難してきたという話。財産を売り食いしながらでも、女中を使って生活している日本人を見て矛盾を感じました。でも奥さんは立派なクリスチャンでした。生まれは宮城県の方でお母さんが信仰の深い方で、常に母から聞かされていた言葉に、「人に使われる人は貧しいゆえ、耳で使わず口で働いてもらいなさい」と教育されたとのこと生き残った私の子供にも心遣いしてくださって、ここでは人生勉強をいろいろしました。

ソ連兵のいる所へも洗濯に行く。また驚きです。その品物は全部日本の軍隊の被服で、中には女物の白足袋まで入っている。こんな品物まで持って行くとは、

ソ連の国情まで考える。でも帰るときはバターの入った粟がゆを食べさせ、薪にする板切れをくれる。でも恐ろしくて戦戦兢兢でした。夫は毎日埠頭に行つてソ連の船に、日本から接収した穀物を本国に送る船積みの仕事に出ていました。

冬と言つても大連は暖かく、私は街の人々からいただいた古着をモンペ・上衣に縫い直し、手製の防寒頭巾をかぶり、子供の遺品のねんねこを着て働きに通つた。日本人の作つた大連の街は、平和であつたらどんなにかすばらしい街だろう。満人の家にも働きに行く、主婦の言葉に、憲兵や兵隊は憎いけれど、普通の日本人は好きだと言ふのです。

大連付近は、落花生が豊富にとれ、難民の口にも入り栄養補給になつた。毎日、毎日港を眺めながら、昔、鬼界島に流された僧俊寛様の心境を考えながら帰国を待ちわびました。

昭和二十一年十二月三日、待ちに待つた引揚船が大連港に近づく。ただただ、嬉しくて涙がとめどなく流れる。一年二カ月余りを暮らした大連、二百余人逝つ

た大連、万感の思いを胸に十年過ごした大陸、二人の我が子の亡骸を残して日本に向けて船は出ました。満州よ……さようなら……。

十二月八日、ああ日本が見えた。ただただ胸がいっぱい。佐世保港に上陸。十二月というのに畑に青い野菜が点々としていた。種々の手続を済ませて、私たち一行は長い間お世話になつた徳島県出身の先生と、再びお会いし得ないだろうと思いつつお別れして、一路長野に向かった。名古屋周辺にさしかかり、戦禍の跡を見て戦争の悲惨さを実感した。

十二月十六日、長野着、故郷の皆様の温かい出迎えを受け、善光寺で合同慰霊祭を行つていただき、汚れた身の回り品を持ってみすばらしい姿で上田に到着。家族は温かい心で迎えてくれた。ただただ、涙の対面でした。

生活安定までの実情

引き揚げ後二カ年近く故郷で暮らす。何かと考えさせられることが多く、いつまで引揚者のレットルに甘んじていてよいのか、子供の将来も考えました。働い

でも働き甲斐のない今の生活、衣住も望めない。人間関係もあり、苦勞の甲斐のある生き方を考える。そのころ、弥栄の先輩、塩原さんが北海道から帰郷して訪ねてくださって、「北海道へ行きましょう。ポロを着て暮らすなら、未開の根釧原野がいいよ」と話し掛けてくれた。親、兄姉の止めるのを断って県庁から許可をもらい、親子三人で先輩や兄を頼って渡道することを決心しました。

昭和二十三年九月、着のみ着のまま津軽の海を渡り、再びの開拓にすべてをかけました。根釧原野は明治以来、濃霧低温の地で農業不能という未開の土地でしたが、大正、昭和と六十年間にわたり、日本の開拓事業のため指導してくださった彼の開拓の神様、中村孝二郎先生が、旧満州弥栄村の方々、六十余人を入植させてくださった土地です。先生の指導、政府や北海道庁など行政の援助のもとに、第二の弥栄村を築く努力をしておられました。私たちは耕地の關係から根室支庁管内に十五町歩の土地を払下げ、売り渡しを受けて、旧軍馬補充部の跡地に鋤を入れました。原生林の

中に空き家もなく、一年前に入植していた先輩三家族の家に一年余り同居、お世話になり、翌年独立した。まずロシア式の丸太小屋を体一つで造り上げ、敗戦以來はじめての自分の住居と思いい嬉しさに胸がつまる思いがした。

それからは死に物狂いで働く。冬は腰までの雪を払い除け、炭材を作り真っ黒になって製炭の仕事をした。夕方家に帰れば靴の中は凍っている。真っ黒になって製炭のそのかたわら、春には雑木、雑草を焼き払い耕作地作りに必死でした。四年間くらいは朝、地下足袋を履いたら夕飯まで脱いだことがあります。米の配給もあまりなく、学校に通う子供のために、親は山菜の中に米粒が数えるほどしか入らない食事のこともありました。でも、どんなに苦しくてもつらくても、あの敗戦を経験した苦難を考えれば、どんなことでも耐えられないことはないかと、不屈の開拓魂で頑張りました。

当時は自然に恵まれ、豊富な山菜、蒨、ワラビ、コゴメ、ゼンマイ、アイヌネギ、山には椎茸や数々の茸、

秋には山ぶどう、コクワの実などたくさんとれました。

二十八年には住宅も新築でき、少し安定してきた。農作物は根釧地方に限られた穀物と根菜類しか収穫できません。中村先生のおっしゃるとおり、根釧は有畜農業でなければ絶対不可能。そして二十七年には冷害で、この年から乳牛の導入が始まる。耕地も原生林を手作業で開墾し、次第に拡大し密林の中の畑なので、火棄で抜根が行われた。その後はブルドーザーで抜根整地と作業のやりやすい畑へと生まれ変わっていった。大型機械へと機械化されて、かつての原牛林も今は見違えるような緑豊かな牧野となった。そして、ここ根釧地方は日本一の草地酪農地帯となりました。満州弥栄村の目指した理想郷が今日の根釧ではないかと…。

我が家でも農地六十町歩ほどとなり、満州生まれの娘、そして孫娘と二代にわたり、良き伴侶に恵まれ、現在、乳牛百六十頭、乳量も年間生産量七百トンの大型酪農となりました。ただ、夫が十七年前に今日の姿を見ず他界したことが一番残念です。今日も大型機械で牧草収穫作業です。

入植後、経営も少し安定してきた昭和四十年、この

第二の弥栄北海道上多和に私たちが満州でお世話になった恩師、徳島県出身の新見先生御夫妻の突然の訪問を受けました。先生は、徳島の師範学校を卒業されて内地で教鞭をとられ、昭和十一年四月、外務省派遣の先生として渡満、各地を転勤され昭和十七年四月、東北満の最果ての地、弥栄在満国民学校長野分教場に着任されました。新見先生と私たち父兄との深い絆は、このときから始まったのです。敗戦、そして一年三カ月の避難生活、言語に絶する苦難の生活の中、先生は綏化から大連、佐世保上陸まで生死を共にして、見守ってくださった先生です。

それから音信もないまま過ぎた十年後の昭和三十年、長野の教え子との連絡が始まり、その夏、先生は長野の教え子や、その両親たちと涙の対面をされたのです。そのとき、北満弥栄の人たちが、不毛の地、北海道根釧原野に第二の弥栄を築いていることを聞き、間もなく私たち親子とも連絡がとれたのです。そしてついに北海道の根釧を御夫妻で訪ねていただきました。二十

年経ちましても、九歳ぐらいで別れた教え子を心配してくださる先生、我が家に到着された先生と再会したときは、お互いにあいさつは言葉になりませんでした。異郷で共に死線を越えてきた仲でなければわからない喜びがそこにありました。尽きぬ話に一夜を明かし、先生は名残りを惜しみつつ帰途につかれました。ちょうどその年は冷涼な夏にて、先生は作物などを御覧になつて胸を痛めたことと思います。それ以後、毎年秋には新米を二十年近くも送つてくだされ、こちらからは北海道の海産物をお送りしたりしました。

先生は帰られてから根釧原野や上多和の風景、組合長さんの説明などの実情を見て、弥栄の人たちがたくましく第二の弥栄を築くため、精魂を傾ける気概に感激して、東京新聞に「不屈の弥栄開拓魂！根釧によみかえる」との記事を投稿されました。その記事を、六十年前に根室から東京に移住されたと言う方が読まれ、あの不毛の地によくぞ！と感激され、五万円を何かに使つてくださると、長野弥栄会に贈つてくださったとのことです（私どもには大金でした）。その御厚意を

受けて子供たちを何回も長野に招待くださいましたが、家を留守にできない酪農家の宿命にて、私はついに実現することができませんでした。家も再新築でき、孫たちも成長した姿をもう一度見ていただきたいと念願しましたが、ついになんか残念に思っております。必ずまた来ますとおっしゃつた先生の言葉が忘れられません。生涯忘れることのできない立派な恩師でした。先生の御冥福をお祈りいたします。

私はまもなく八十五歳を迎えようとしております。この波乱万丈の人生を今日まで生かしていただいたことに感謝しながら、今は小学校一年生と二年生の二人の曾孫たちが、ランドセルを背負つて自転車で登校する姿に、気をつけてと見送る毎日です。

〃四世代円ま満く住むには角たてず〃
下手な川柳の一句です。

【執筆者の横顔】

寿々子さんは明治四十四年九月、長野県城下村生まれで、上田市の上田美科高等女学校を優秀な成績で卒

業された。

昭和七年ごろの日本の国情は過剰人口対策から経済危機脱出のため満州移住を計画、まず満州武装移民を東北十一県から在郷軍人四百数十名を選んで北滿の佳木斯の奥地、永豊鎮に入植させた。寿々子さんの兄も入植者の一人である。

昭和十年春ごろから、寿々子さんも日本の前途を考え、自らの将来についても考え、兄も行っている満州へ行く決心をした。心配してくださる方の仲人で結婚が決まり、九月渡滿となり無事に弥栄村に着いた。弥栄村は、春・秋ともなれば百花繚乱、野菜はもちろん主食の米や五穀が実る。それは本場に桃源郷であった。

昭和十六年から十九年にかけて弥栄村を視察するものが旺盛をきわめた。入植者には嫁がくる。満州生まれの二世が一人、二人と次々に誕生して村がにぎやかになり、昭和十八年には、寿々子さんの家でも長女が小学校に入学することになった。

二十年六月から弥栄村にも召集令状が届き、八月十日には寿々子さんの夫にも令状がきた。八月十二日朝

親子四人は十有余年、獵銃と鍬を持って情熱のすべてをかけて築いた弥栄村を後に日本に向かって南下した。夫が出征中の逃避行である。翌十三日佳木斯に着く。さらに綏化まで四日間、雨と夜の寒さと飢えとの闘い、子供たちは泣き叫び、この世の地獄を見る。綏化で収容された格納庫で幸運にも御主人と合流できた。大連への貨車で十日間は言語に絶する悲惨さ、病人は次々に亡くなる。寿々子さんの一歳の子も奉天出發後、亡くなった。冷たくなった弟を九歳になる姉は、大連まで背負って行って葬った。七歳になった長男も発病して、大連の土となった。

昭和二十一年十二月三日、待ちわびた引揚げとなった。佐世保に上陸し、十六日長野の故郷で温かい出迎えに、ただただ涙の対面。引き揚げ後、昭和二十二年九月、友人の勧めもあり北海道の根釧原野を開拓すべく、親子三人で渡道。根釧原野は古来、濃霧低温の地で農業不能という未開の土地であったが、鍬を入れ、死にもの狂いで働き、四十九年間、苦闘と努力精進の結果、満州生まれの娘と孫娘の二代にわたり、良き伴

侶に恵まれ、農地六十町歩、乳牛百六十頭、乳量年間七百トン生産、大型酪農経営をするまでとなった。御主人は十七年前に他界されたが、満州弥栄村の御主人が目指していた理想郷を、北海道の根釧原野に見つかりの観と涙する竹花寿々子さんである。

(他引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

人間の生きる道をめざして

秋田県 原 ミネ

はじめに

昭和二十年七月十二日、満州国榆樹屯第八三四一部隊陸軍官舎軍人、軍属の家族全員に、敷島神社の境内へ緊急集合命令が出た。そこで部隊長の訓示があり、「戦局はすでに終わりに近く、しかも、我が軍の前途は見通しも暗い感じである。第八三四一部隊の家族全員これより二十キロ南下し、梅河江へ移動する」とい

うことだった。一回官舎に戻った。だれもが子供の二、三人もいる若い人たちがかりだった。行き交う人々皆一様に緊張した面持ちで「しつかりやりましょうね」「お互いに頑張りましょうね」など力強い言葉を交わし合っていたが、それは、それは張りつめた気持ちであつた。五年間も住み慣れた土地も去り難く、それにも増して三人もの子供連れでは、行く先不安で、ただ大衆と行動を共にするしかなく、もうすぐ酷寒零下三〇度の冬になるので、取りあえず子供たちの着替えをリュックサックに詰めて持ちました。

第八郎との別れ

榆樹屯の駅はもはや重苦しい雰囲気だだれの顔を見ても生きた心地もなく土気色であつた。満鉄社員の前八郎に最後の別れを告げ、第八三四一部隊飛行隊の格納庫へひとまず集合したので。八郎は別れぎわに心から滲み出る言葉で「姉さん、気をつけてな。生き延びられるだけ生きてくださいよ。良彦（長男）も元気でな!!母さんの言うことをよく守るのだよ」とこれが最後の別れとなつたのです。思えば素直で心の優しい